

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

所属部局・職	野生動物研究センター・博士課程学生
氏名	榊原香鈴美

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
愛知、犬山
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
比較認知科学実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 28 年 9 月 5 日 ~ 平成 28 年 9 月 7 日 (3 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学霊長類研究所、教授、友永雅己
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
<p>PWS 必修科目の比較認知科学実験実習では、哺乳類の認知実験について動物のトレーニングをする際の留意点や課題設定のレクチャーを受け、チンパンジーとウマを対象とする実験のようすを間近で見学した。9月5、6、7日の3日間で友永先生、足立先生、松沢先生の実験室を訪問した。友永先生の実験室では、視覚能力の解明を目的に、大型類人猿の種の判別、垂直・水平方向のずれの判別、数(量)の判別、植物の鮮度の判別に対する実験がローテーションで行われていた。樹上性のチンパンジーと草原で暮らすウマで垂直・水平方向のずれの判別能力に差があり、これが生息環境を反映しているかという問題設定は非常に興味深かった。また、植物の鮮度の判別実験では色・光沢・シワなどいくつかある項目のどの点で、もしくは統合的に情報を捉えて判別しているかを明らかにするには、複数の課題とアプローチが必要だと感じた。野外におけるエサの選択要因へと考察が及ぶまでを想像すると難しさはあるが、第一に能力を解明することが議論のトリガーになりうるため有意義な研究だと思った。</p> <p>足立先生の実験室では、音刺激による色識別への影響を明らかにする実験がおこなわれていた。音によって色調が変化してみえ、それが複数個体で共通しているという共感覚の存在が、言語の発生に起因するという仮説が覆されるのか面白い研究であった。トレーニングにおいて色弁別の曖昧さを残しつつ、個体の中の識別能力を引き出すよう課題が設定されていた。私は動物の認知実験に対して、動物は教えたものを選択するというイメージが強かったが、本質的な能力測定のために人のバイアスを排除する工夫を凝らした実験計画を見て認識が改まった。画面内の動くバーを止めるという実験では、チンパンジーの”待てない”という種の特徴が見られ、他の動物種との比較や、野生でその特徴が残されてきた理由を考えると面白いと感じた。</p> <p>松沢先生の実験室では、たまたま居合わせた海外訪問者とともに実験のようすを見学した。ハズバンドリーのようなようすは私にとってとても新鮮で、認知実験への参与に対する動物福祉の観点や、非侵襲的なサンプルの長期回収の方法について見直す機会となった。すべての先生に実験課題に取り組む個体の行動差と能力差の印象をうかがったが、実験ごとで正答率にばらつきがあり得意分野がある一方、課題に取り組む様子は一貫していることに個体のらしさが出ていると感じた。イルカを対象とする自身の研究においても個体差を意識することの大切さを再認識した。野外で索餌をするとき1日で行くつかの採食パッチを訪れるという本来の姿と、霊長類研究所の各実験室の訪問を重ねるという視点も賛同でき、被験者にとってもいい環境であると思った。海棲哺乳類における認知実験は水という媒体を通すことでひとつ複雑さが増すが、そのハードルを超えてえられる科学的な新しさからは、認知生態分野の発展も期待できる。本実習は、自身も海棲哺乳類を対象とする認知実験に挑戦したいと思えるような機会となった。</p>

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



写真 1. ウマの数の識別実験



写真 2. ハズバンダリー後のチンパンジーと松沢先生

6. その他 (特記事項など)